

研究ノート

*As You Like It*における 二人の Jaques についての一考察

辻 英 子

同志社女子大学・表象文化学部・英語英文学科・准教授

A Study of Two Jaques in *As You Like It*

TSUJI Hideko

Department of English, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Associate professor

序

William Shakespeare (1564-1616) の喜劇 *As You Like It* には、Jaques という名前を持つ人物が二人登場する。一人は追放された前公爵 Duke Senior に仕える貴族で ‘melancholy Jaques’ (「憂鬱屋の Jaques」) と呼ばれる皮肉屋の厭世家であり、もう一人は劇の冒頭に主人公 Orlando の次兄として彼の台詞の中で言及され、終幕に登場する de Boys 家の次男である。二人を区別するため、登場人物一覧では、終幕に登場する Jaques は、Jaques de Boys と表記されることが多い。

このように劇中で同じ名前の人物が二人登場することは研究者たちを少なからず当惑させ、従来より様々な解釈がなされてきた。例えば New Variorum 版 *As You Like It* の編者 H. H. Furness は、Shakespeare が Jaques という人物を二人登場させたことを “a proof of haste ... or of careless indifference” (8) と述べて、劇作家が「慌てていたためか、あるいはそのことに無頓着なためである」としてい

る。また、Arden 版の編者 Agnes Latham は “maladroit forgetfulness” (lxviii) と述べて、名前の重複を劇作家の「不手際な失念」だとしている。更に New Cambridge 版の編者 Michael Hattaway は、“a ... willful eccentricity on Shakespeare's part” (71) と述べて、劇作家は「敢えて奇妙なことをしている」のだとしている。

上記の批評家たちが名前の重複を劇作家の不注意ないしは奇行による些末な問題だと捉えているのに対して、次章で提示するように、そこにより深い意味付けをしようとする見解も存在する。筆者もその一人であり、本学において過去に2回、英語英文学科4年次生による *As You Like It* 上演¹⁾に関わってきた中で、劇中に二人の Jaques が登場することに注目し、そのことを意味のあるメッセージとして演出に取り入れてきた。本稿では *As You Like It* において二人の Jaques が登場することの意味をその劇中での役割を再考することによって探ってみたい。

I

New Cambridge 版 *As You Like It* の編者 Arthur Quiller-Couch と John Dover Wilson は、劇の冒頭で名前を紹介されただけでその後全く出番のない Jaques de Boys が終幕で唐突に登場することについて

We may indeed ask why the third De Boys should be dragged in here at all when a messenger would have done equally well; perhaps he played a more considerate part in the original draft. (164)

と述べて、実際には Jaques de Boys はこの作品の最初の構想ではもっと大きな役割を与えられていたかもしれないと推測している。さらに

Possibly, then, there existed no melancholy Jaques in the first draft, and the conception of him had not yet begun to take form in Shakespeare's brain when the revision of the opening scene was in hand. (112)

と述べて、2幕以降に登場する憂鬱屋の Jaques の方は最初の草稿ではまだその存在がはっきりと造形されていなかったのだとしている。Arthur Quiller-Couch と John Dover Wilson の見解によれば、作品が書き直されていく過程で Jaques de Boys の比重が小さくなり、代わりに後で生み出された憂鬱屋の Jaques の方が大きな存在感を持つようになったということになるが、ここで興味深いのは、結果として最終的に出来上がった作品において、二人の Jaques がお互いに補完し合うような位置付けをされていることである。

劇の進行を時系列で見ていくと、1幕1場で

名前を紹介された Jaques de Boys が5幕4場で実際に観客にその姿を現すまでの間、その不在を埋めるかのように憂鬱屋の Jaques が2幕5場に登場し、“All the world's a stage” (2.7.139)²⁾ではじまる「人生の七段階」の長台詞に代表される饒舌で観客の注目を集める。

Anthony Wolk は、Jaques de Boys と憂鬱屋の Jaques の関係について、*As You Like It* の種本である Thomas Lodge の *Rosalynde*³⁾ の登場人物たちとの比較から興味深い論考をしている。彼は以下

In *Rosalynde* the three brothers, Saladyne, Fernandyne, and Rosadar (who correspond to Oliver, Jaques de Boys, and Orlando in *As You Like It*), appear to exemplify the three temptations of the world according to John ii: 16-17: “For all that is in this world, (as the lust of the flesh, the lust of the eyes, and the pride of life) is not of the Father, but is of this world. And this world passeth away, and the lust thereof: but he that fulfilleth the will of Gad abideth ever.”... The eldest brother Saladyne clearly exemplifies the lust of the eyes or avarice.... Fernandyne then seems to be guilty of spiritual pride.... Rosadar, the youngest brother, as the majority of the story makes clear, must face the temptations of the flesh, or lechery, in his love for Rosalynde. (101-102)

のように述べて、Thomas Lodge の *Rosalynde* に登場する Saladyne, Fernandyne, Rosadar の三兄弟（彼らはそれぞれ *As You Like It* における Oliver, Jaques de Boys, Orlando に相当する）は、新約聖書のヨハネの第一の手紙2章16～17節にある人生における

三つの誘惑である「強欲」、「高慢」、「肉欲」を体現する人物として描かれていると指摘した上で、

The melancholy Jaques then corresponds to the temptation of the pride of life. And like Oliver and Orlando, by the end of the play he has been converted from his folly and restored to spiritual health. (104)

と述べて、Shakespeare の *As You Like It* では、「高慢」を体現しているのは舞台にほとんど登場しない次男の Jaques de Boys ではなく憂鬱屋の Jaques だとして、本来なら Jaques de Boys が担うべき次男としての役割を同じ名前を持つ憂鬱屋の Jaques が代わりに担っているとしている。

Wolk の指摘からは、Jaques de Boys と憂鬱屋の Jaques は偶然同じ名前であるだけではなく、その人物像や役割にも共通点があることが推測できる。Jaques de Boys の方は出番が少ないため、私たちはその人物像を詳細に知ることはできないが、少なくとも冒頭の Orlando の台詞

My brother Jaques he keeps at school, and report speaks goldenly of his profit; (1.1.5-6)

からは、彼は学問に打ち込み、その才覚を認められていることがわかる。*As You Like It* に描かれる当時の社会では、長子相続制度が取られていたため、一族の財産はすべて長男が受け継ぎ、次男以下の男子は自ら出世の道を求めて、あるものは学問に打ち込み、あるものは武勇の腕を磨く必要があった。三男の Orlando は長男 Oliver の屋敷の居候として家畜同然の扱いを受けているが、腕っぷしでは Oliver を凌ぎ、レスリングの試合では Frederick 公爵のお抱えレスラー Charles を打ち負かす。Oliver は

Orlando の武勇の才に加えて、彼の生来の頭の良さや品格、人望の厚さを疎み、末弟に対する憎しみを募らせるのだが (1.1.162-169)、次男の Jaques de Boys に対しては、教育を受けさせ、それなりの援助をしている。これは、Oliver にとっては Orlando の存在が領主としての自らの地位を脅かすものであるのに対して、学問の徒である Jaques de Boys の存在は目障りではなく控えめで、憎しみや嫉妬の対象になりえないことを示唆している。

このような Jaques de Boys の俗世の価値観から隔絶された学者としてのイメージは、憂鬱屋の Jaques にも共通するものであることは言うまでもない。彼は宮廷を追われた Duke Senior に付き従い、立身出世の道を捨ててアーデンの森に隠遁し、劇中、様々な場面で自らの醒めた人生哲学を披露する。彼はまた自らの憂鬱な気質が諸国を旅してきたことから生まれたのだと述べる (4.1.15-19) が、当時の貴族の子弟にとって学問の仕上げが諸外国への遊学であったことを考えれば、豊かな旅の経験を持っている Jaques は過去に大学で学び、かなりの教養を蓄えた人物であることがうかがえる。

Harold Jenkins は *As You Like It* における同じ名前を持つ二人の Jaques の存在に関して

It seems clear enough that these two men with the same name were originally meant to be one. (42)

と述べて、二人の人物は元々同じ一人の人物として造形されたのだとし、

As things turned out Jaques could claim to have acquired his famous melancholy from travel and experience; but I suspect that it really began in the schoolbooks which were studied with such profit by Jaques de Boys. (42)

と述べて、Jaques が身につけた憂鬱な気質は元々は Jaques de Boys が学んだ書物に端を発しているのだと主張している。

Shakespeare が実際に *As You Like It* を執筆した過程で二人の Jaques の存在についてのどのような意図を持っていたのかは確かめようがないが、少なくとも Jaques de Boys と憂鬱屋の Jaques 間にまるで同一人物であるかのような共通点が見いだせることは注目に値する。次章以降ではこの二人の Jaques が実際に舞台上で対面する 5 幕 4 場に焦点を当てて、二人の関係とその役割についてさらに考えてみたい。

II

5 幕 4 場、アーデンの森で Rosalind と Orlando をはじめとする四組の男女の結婚式が取り行われた直後、突如として Jaques de Boys が Duke Frederick の使者として登場し、兄 Duke Senior を刃にかけようと森にやってきた Frederick が隠者との問答によって突然改悛し、兄に公爵の地位を返却する決心をしたことを伝える。知らせを聞いた Duke Senior がそれを受けて、共に苦勞をしてきた仲間をねぎらい、結婚式の余興を続けるよう指示するや否や、憂鬱屋の Jaques は Duke Senior の台詞に割って入るような形で Jaques de Boys に話しかけ、以下のような会話を交わす。

Jaques. Sir, by your patience. If I heard you rightly,

The Duke hath put on a religious life,
And thrown into neglect the pompous court?

Jaq. de Boys. He hath.

Jaques. To him will I. Out of these conbertites,
There is much matter to be heard and learn'd.(5.4.179-184)

Jaques de Boys の報告に喜ぶ一行の中で唯

一人憂鬱屋の Jaques だけが、改悛した Duke Frederick の身の振り方から学ぶべきものがあると判断し、Frederick の元からやってきた Jaques de Boys に後を託すかのように、自らその場を去り、森で隠遁生活を送る決意をした Duke Frederick の元へと向かうのである。この展開について Tatyana Hramova は

Jaques meets his name-sake Jaques de Boys and decides to stay in the forest, hence literally becoming De Boys — “of the forest”. (123)

と述べて、“de Boys” がフランス語で「森」を意味することから、ここで憂鬱屋の Jaques が森に留まる決意をすることによって文字通り “Jaques de Boys” 「森の Jaques」になるのだと興味深い見解をしているが、まさにこの場で、二人の Jaques はその立ち位置を入れ替えるのである。

1983年にカナダで上演された John Hirsch 演出による *As You Like It* では、この場面における二人の Jaques の不思議な類似点をはっきりと示されていた。Hirsch の演出では、終幕に初めて姿を現した Jaques de Boys は憂鬱屋の Jaques と同じ服装をし、同じように眼鏡をかけた学者らしい風貌をしていて、双子のようによく似ていた。実際には、憂鬱屋の Jaques を演じた俳優の方が年かさであり、森での不自由な生活を表すようにその服装も古びて擦り切れていたが、それはもしも Jaques de Boys が森で何年も暮らしていたらまさにこうなっていたであろうような姿であり、逆に言えば Jaques de Boys の方は憂鬱屋の Jaques の若き日を彷彿とさせる姿であった。

Hirsch の舞台に触発され、筆者も本学英語英文学科 4 年次生が *As You Like It* を上演した際に、二人の Jaques に類似の衣装を着せ、終幕で憂鬱屋の Jaques が一行の元から去る際に、これから自分の代わりに Duke Senior のそばにいてほしいという新旧交代のメッセージを込

める意味で、手にしていた一輪の薔薇を Jaques de Boys に手渡すという演出をした。

以上のように、*As You Like It*における同じ名前を持った二人の Jaques は共に俗世間から隔絶した学者のイメージを持つ人物であるという共通点を持ち、劇終幕にその立ち位置を交代すると考えられるのであるが、この二人が劇中で担う役割はいったいどのようなものなのだろうか。

III

5幕4場で Jaques de Boys の知らせを受けた Duke Senior が

Welcome young man.

Thou offer'st fairly to thy brothers' wedding;

To one his lands withheld, and to the other

A land itself at large, a potent dukedom. (5.4.165-168)

と述べて、その登場を称えるように、Jaques de Boys は兄と弟である Oliver と Orlando にそれぞれの立場にふさわしい領土を与えると、いう喜ばしいメッセージを伝える役目を担っている。しかしながら三人兄弟の次男である彼自身は終幕まで一切舞台上に姿を現さないことから分かるように、Oliver や Orlando に比べて存在感が希薄である。これは、例えば *King Lear* における三人の娘のうち、親孝行な三女の Cordelia と対極にいる残酷な二人の姉として、次女の Regan が長女の Goneril に勝るとも劣らない存在感を持っているのとは対照的である。要するに Jaques de Boys は劇中对立する兄と弟のどちらの側につくこともなく、目立たずひっそりと双方から距離を置いて、最後に和解した両者に更なる祝福をもたらすのである。

一方、もう一人の憂鬱屋の Jaques にしても、劇中での役割を考えると、Jaques de Boys に比べればはるかに登場場面は多いが、そこで何

か積極的に行動を起こしたり、他の人物に対して大きな影響力を持っているわけではない。彼はアーデンの森で出会う人々と次々に対話を交わし、そこで自らの厭世的な人生観を披露するのであるが、彼の言葉は Touchstone に対して彼の結婚について助言すること (3.3.65-86) を除いては、Duke Senior との社会風刺についてのやり取り (2.744-87) や Orlando との恋愛についてのやり取り (3.2.249-289)、更には Rosalind を相手に自らの憂鬱の出所を説明するやり取り (4.1.1-27) に見られるように、相手を説得することはできず、むしろ反論される結果になってしまう。憂鬱屋の Jaques は Duke Senior が

I love to cope him in these sullen fits,

For then, he's full of matter. (2.1.67-68)

と述べるように、悲観的な人生観の中に含蓄ある意見を蓄えた興味深い人物として描かれてはいるが、プロットの進行に寄与するという点では極めて消極的な働きしかしていない。

更に憂鬱屋の Jaques は終幕で去ろうとする彼を何とかして引き留めようとする Duke Senior とのやり取り

Duke Sen. Stay, Jaques, stay.

Jaques. To see no pastime, I. What you would have

I'll stay to know at your abandon'd cave. (5.4.193-195)

の中で、Duke Senior とともに暮らしてきた洞窟に今後も留まると述べているが、これは、もし Duke Senior が望むならば、これから先も彼に会う気持ちがあるということであり、この後の展開として、改心した Duke Frederick と兄の Duke Senior との間に入って仲介者としての役目も果たすといった可能性をも示唆しているように思われる。

要するに、二人の Jaques に共通するのは、劇の進行の中で積極的な行動をするわけではないが、対立する兄と弟との間にいる平和の仲介者ということであろう。下図



に示すように、二人の Jaques はそれぞれの兄弟の真ん中に居て、双方と良好な関係を持ち、劇の幸福な結末をより確かなものにしていてと考えられるのである。

結び

以上、本論において *As You Like It* に同じ名前を持った二人の Jaques が登場する意味について、その共通点に注目し考察してきた。二人の Jaques は共に俗世間から距離を置いた人畜無害な学者のイメージを持ち、それぞれ Oliver と Orlando、Duke Senior と Duke Frederick という対立する兄弟の間の和解を取り持つ仲介者のような存在であると考えられるのだが、この二人の Jaques の立ち位置から筆者が想起したのは、河合隼雄の『古事記』神話における中空構造」という論考である。河合は『古事記』に登場する重要な三組の三神（タカミムスヒ・アメノミナカヌシ・カミムスヒ）（アマテラス・ツクヨミ・スサノヲ）（ホデリ・ホスセリ・ホオリ）の中で、それぞれ真ん中に位置するアメノミナカヌシ、ツクヨミ、ホスセリが無為の存在であることに注目し、

それは、権威あるもの、権力をもつものによる統合のモデルではなく、力もはたらきももたない中心が相対立する力を適当に均衡せしめているモデルを提供するものである。（中略）空を中心とすると、統合するものを決定すべき、決定的な戦いを避け

ることができる。それは対立するものの共存を許すモデルである。（47-48）

と述べて、中心に無為の神を置き対立を避ける日本神話の「中空構造」が、「日本人の思想、宗教、社会構造などのプロトタイプとなっていると考えられる」（41）と示唆している。

河合の論考では、中心に無為の存在を置いて対立を回避するのは日本人独自のものということになるが、*As You Like It* においても三人組の真ん中にいる人物が取り立てて何もせず、対立する他の二人の間の緩衝材のような役目を担っていることは大変興味深い。俗世のしがらみから遠く離れた隠遁者のような立場に身を置く二人の Jaques は、その無為の働きによって、終幕にあらゆる対立が無効化されるこの稀有な喜劇の基調を作り上げることに少なからず貢献しているといえるだろう。

注

1. 筆者は本学において2003年と2012年に *As You Like It* の舞台上演を担当した。
2. Agnes Latham, editor, *As You Like It* (The Arden Shakespeare, London: Methuen, 1997) p.139. 以下、本稿中の *As You Like It* からの引用はすべてこの版に拠り、括弧内に幕、場、行数を示すものとする。
3. *Rosalynde* のテキストについては Geoffrey Bullough, editor, *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. Vol.2. (Routledge, 1958) pp.158-256を参照。

引用・参考文献

- Bullough, Geoffrey, editor. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. Vol.2. Routledge, 1958.
- Furness, H. H., editor. *As You Like It* (A New Variorum Edition of Shakespeare). American Scholar, 1963.
- Hattaway, Michael, editor. *As You Like It* (The New Cambridge Shakespeare).

- Cambridge UP, 2000.
- Hirsch, John, director. *As You Like It: Stratford 1983*. CBC Learning, 1983, VHS.
- Hramova, Tatyana. "The Mystery of Two Jaques in Beckett and Shakespeare" *Notes and Queries*, vol.58, no.1, Mar. 2011, pp.122-125.
- Jenkins, Harold. "As You Like It." *Shakespeare Survey*, vol.8, 1955, pp.40-51.
- 河合隼雄「『古事記』神話における中空構造」『中空構造日本の深層』（中公文庫）中央公論新社，1999，pp.31-51.
- Latham, Agnes, editor. *As You Like It* (The Arden Shakespeare). Methuen, 1997.
- Marshall, Cynthia. "The Doubled Jaques and Constructions of Negation in *As You Like It*." *Shakespeare Quarterly*, vol.49, no.4, Winter 1998, pp.375-392.
- Quiller-Couch, Arthur and John Dover Wilson, editors. *As You Like It* (The New Shakespeare). Cambridge UP, 1957.
- Wolk, Anthony. "The Extra Jaques in *As You Like It*." *Shakespeare Quarterly*, vol.23, no.1, Winter 1972, pp.101-105.